

2019年5月号 簿記論 つぶ問

1 問目

【問題】

当社では、本店の他に A 支店と B 支店で商品を販売している。B 支店が販売する商品はすべて本店および A 支店が外部から仕入れた商品に対して一定の利益を付加して振り替えられたものである。商品売買は 3 分法により記帳している。

1. A 支店から B 支店に対して商品（A 支店仕入原価 3,000 千円、B 支店への振替価額 4,000 千円）を振り替えた際の仕訳（本店、A 支店、B 支店すべて）について、①本店集中計算制度の場合、②支店分散計算制度の場合でそれぞれ答えなさい。ただし、仕訳が不要な場合は「仕訳不要」と答えること。
2. 期末における商品の状況は次のとおり（単位：千円）であり、棚卸減耗損は生じていない。そこで、①B 支店の帳簿上の商品評価損、②B 支店の帳簿上の繰越商品、③本店の帳簿上の繰延内部利益、④外部公表用の本支店合併損益計算書における商品評価損、⑤外部公表用の本支店合併貸借対照表における商品の金額をそれぞれ答えなさい。

	期末棚卸高 (内部利益含む)	期末棚卸高 (内部利益除く)	正味売却価額
本店	—	10,000	9,000
A 支店	—	5,000	6,500
B 支店	7,000	5,000	5,500

【解答】

1-①

本	(借)	B 支店	4,000	(貸)	A 支店	4,000
A	(借)	本店	4,000	(貸)	本店売上	4,000
B	(借)	本店仕入	4,000	(貸)	本店	4,000

1-②

本	(借)	仕訳不要		(貸)		
A	(借)	B 支店	4,000	(貸)	支店売上	4,000
B	(借)	支店仕入	4,000	(貸)	A 支店	4,000

2-① 1,500 千円

2-② 5,500 千円

2-③ 500 千円

2-④ 1,000 千円

2-⑤ 19,000 千円

【解説】

1 本店集中計算制度と支店分散計算制度の違いは、本誌で説明したとおり支店間の取引についていったん本店を通すかどうかです。なお、勘定科目は「本店仕入」を「本店から仕入」、「支店売上」を「支店へ売上」などとすることや、支店を区別して「A 支店から仕入」「B 支店へ売上」などとすることもあります。

2 それぞれの金額は次のとおりです。

①B 支店では 7,000 千円（内部利益含む）→5,500 千円（正味売却価額）へ下げたため、処品評価損が 1,500 千円となります。

②同じく B 支店では正味売却価額まで下げるため 5,500 千円となります。

③もともとの内部利益は 2,000 千円ですが、このうち 1,500 千円はすでに B 支店で商品評価損として計上されています。本店の総合損益勘定で受け入れる B 支店の損益はこの 1,500 千円が差し引かれた後の金額となります。そこで、本店で控除して期末に残る繰延内部利益は 5,500 千円（正味売却価額）－5,000 千円（内部利益除く）＝500 千円です。

④B 支店の帳簿上は商品評価損が 1,500 千円となりますが、本支店合併損益計算書ではもともと内部取引がなかったものとして扱います。つまり、B 支店の期末在庫はもともと 5,000 千円であったものとみなし、ここからは商品評価損が生じていないこととなります。よって、商品評価損は本店の商品の 1,000 千円のみです。

⑤本店 9,000 千円（正味売却価額）＋A 支店 5,000 千円（期末棚卸高）＋B 支店 5,000 千円（期末棚卸高・内部利益除く）＝19,000 千円